

十二年前に亡くなった先住職がある人からいただいた、幅は六センチ、長さが二十五センチ。一行が十七字詰めで三行の写経本があります。

「応永十九年北野天満宮一切経大般若経卷四〇六」という由緒書が添えられています。読みやすい楷書体で、強く太いけれど優しさのある筆致で经文が墨書されていました。

誰かが一冊の写経本を裁断して、何十もの断片を作って売り払ったのでしょうか。ところどころに虫食いの跡があるから古いものかもしれない。けれど、切れ端ですからそれほど価値があるとは思えず、安物の額に売れたままで、毎日仕事をする寺務室の壁にかけてありました。

目につくところに飾ってあったので、なんで、神社に大般若経六百巻があるのかとずーっと、気にはなっていました。しかし、生来のなまけものゆえ、調べほどの意欲はありません。

意欲と興味がなくても、いつも目にしていれば、知らぬまにからだの奥底へしみこんでいるのが、ありがたい。ある日、ふと気がつきました。经文と天満宮の関係を解きあかすキーワードは、神仏習合だと。なんでそんなことに気がつかなかったのか。

書棚に目を向けました。読まずにほっておいた本を探したので。瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮』(平凡社)です。その本のなかに、次のような記述があります。

「中世、北野社への参詣人は坂の向こうに見えてくる巨

「これは、重要文化財級のお宝か！」



大な屋根にまず驚かされたことであろう。それは今は存在しない北野経堂の屋根である」

現在、京都の北野天満宮へ行っても、仏教経典との関係をつかがわせるような形跡は何もありません。目の前にある現実だけが真実と思ひ込むのが浅はかです。北野天満宮は室町時代以降、何千巻もの経典を書写して所蔵読誦する仏教施設を併設していたのです。神仏習合です。習の字には、「重なる」という意味があります。ふたつが溶けてひとつになったわけではなく、神さまと仏さまがそれぞれの主体を失うことなく重なり合う。この重なり具合が筆者の想像を絶するものでした。

北野天満宮の経堂は明治三年(一八七〇年)に廃仏毀釈で取り壊されます。所蔵されていた膨大な経典の大部分が近くの千本釈迦堂(大報恩寺)に移され、昭和五十六年に重要文化財に指定されています。しかし、混乱のなかで行方知らずになった欠本もあるという。ならば、わが手もとにあるのは、断片でなければ重要文化財になるお宝なのか。慌てて粗末な額から取り出して表具店へ送り、大枚をはたいて掛け軸に仕立て直したのです。

ただし、その後のことです。ある学術論文が教えてくれました。北野天満宮『大般若経』は一行が十四字だといふのです。わが写経は先述したように十七字。限りなく贋作(がんさく)にちかいです。

この紙切れの贈り主は古美術店巡りが趣味だったといいますが、残念ながらすでにこの世にはおられない。黄泉の国で苦笑いしているでしょうか。

か。

看つけた!

右の欄で紹介したように、もともとは絶妙の間合いでかさなりあっていた神仏の関係を無理やりはがしたのは、明治維新です。

それが、なぜ、どこで、どのように起きたかを著した好著を読みました。鶴飼秀徳著『仏教抹殺』(文春新書)です。新書の後ろ扉に、平成30年12月20日第一刷発行とありますから、出たばかりです。

作者の略歴には、「ジャーナリスト、1974年京都市右京区生まれ、報知新聞社、日経BP社を経て、2018年1月に独立、浄土宗正覚寺副住職」とあります。2015年に出版されて話題になった『寺院消滅』(日経BP社)の著者でもあります。

ジャーナリストですから、廃仏毀釈の現場へ行き取材します。実際に取材しているから、これまでの類書より、わかりやすい。と感激したのは、私だけではなさそうです。

2月2日付け日経新聞朝刊「日本史ひと模様」という連載で、テレビ画面でおなじみの歴史家・本郷和人氏が次のように書いているのをみつけました。

「凄い本を読んだ。(途中略)。鶴飼秀徳による『仏教抹殺』なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』である。震えるほどに衝撃を受けたので、ふだんやらないがご紹介したい」

以下、『仏教抹殺』の中であつかわれている、長野県松本での廃仏についてより詳しく補足してくれます。廃仏毀釈でわかりづらいことのひとつに、地域差があります。激しく仏教が抹殺された地域とそうでない地



域があるのです。ジャーナリストの鶴飼氏は激しかった地域のひとつとして、現在の長野県松本をあげますが、歴史家の本郷先生はそれを補ってくれます。

松本地方で激しい廃仏をおこなったのは、戸田光則という知事です。光則は松本藩七万石の城主で、松平を名のり譜代の大名だったのが、維新とともに葵のご紋を返上して、姓も松平から戦国以前の「下田」にもどし、徳川とは無縁のふりをします。そこへ届いたのが維新政府の神仏分離令、新政府は分離を命じて廃仏まで言うてないのに、松本城最後のお殿様は、新政府に付度し張り切りすぎて、菩提寺まで取り壊してしまつた。

東大の教授である本郷先生が「明治政府が、仏教の否定に精励したとばかりぼくは思っていた。いや、ちがう！政府はあくまで神と仏の分離を促しただけなのだ」と気づくくらいだから、凄い本です。本郷先生はおまけにこんなこともおしえてくれます。

「いまウィーン・フィルにヘーデルボルク兄弟(兄がバイオリン、弟がチェロ)が在籍している。(途中略)彼らの母は日本人で大垣の戸田家の一族だそうだ。(途中略)伊藤博文の「女性大好き」は有名だが、彼の憧れの一人が前述の戸田極子さん。このスキヤンダルが公になると、伊藤は彼女の夫をウィーンの全権公使に抜擢した。戸田家はウィーンと縁が深いようだ」

廃仏毀釈から現在のウィーンフィルの音楽家へ、そして伊藤博文公の女性好きにまで自由自在に話題がとぶ。ボーっと生きていない学者先生に教えられて、重い話題が愉快になった新聞記事でした。